

<原著> 第45回 日本赤十字社医学会総会 優秀演題

1年目看護師による自発的勉強会を用いた 薬剤インシデント減少への取り組み

神戸赤十字病院 医療安全推進室

高田ゆかり 松林 照久 杉本 幸司

An approach to the reduction of drug-related incident by new graduate nurse's self-motivated workshop

Yukari TAKADA, Teruhisa MATSUBAYASHI, Koji SUGIMOTO

Office of medical safety promotion Japanese Red Cross Kobe Hospital

Key words : 1年目看護師 薬剤インシデント 自発的勉強会

はじめに

当院における平成19年度のヒヤリ・ハット報告（以下インシデントとする）総数1510件のうち、薬剤関連のインシデントは最多の358件（23.7%）を占め、中でも1年目看護師（以下新人看護師とする）による報告は74件（薬剤関連インシデントの20.6%）であった。一方、平成20年度は7対1看護基準を満たすため、前年度の2.8倍にのぼる新人看護師を採用したことから、新人看護師によるインシデント件数が相当数増加することが予測された。さらに、指導的立場となる看護師の業務負担も増加し、病院全体のインシデント総数が著しく増加する可能性が危惧された。新人看護師による薬剤関連インシデントを未然に防止できれば、インシデント総数の増加を少しでも抑制できると考えた。そこで、新人看護師による自発的勉強会を用いたplan-do-check-act cycle（PDCA cycle）を行い、良好な結果を得たので報告する。

方 法

新人看護師による医療安全への主体的関与を推進するため、平成20年6月から平成21年3月の間に、薬剤関連インシデント防止に関する取り組みを実施した。

まず、各部署の新人看護師6-7名で小グループ

を構成し、小グループ毎に部署内で発生した薬剤インシデント事例を任意に選択して問題点の抽出を行う。その結果をもとに、当該インシデントに対する防止策や問題点の解決策を立案・実施し、定期的に勉強会や分析会を開催して防止策実施後の評価を行う。これらの取り組みを、あらかじめ年次計画書にまとめて医療安全推進室に提出させ、年度末に成果報告会を行う。なお、取り組みの主な支援は係長が行い、内容は薬剤関連であればすべて可とした。

また、今回の取り組みの中では、小グループ毎に行う自主的勉強会を特に重視し、支援者となる係長を通じて定期的に開催させるように徹底した。医療安全管理者は各係長と個別に面談し、自主的勉強会を重視する意図を詳細に説明するとともに、取り組みの進捗状況や各グループにおける問題点を確認して支援を行った。さらに、係長会議においても中間報告会を行い、係長間での情報共有や意見交換を行う機会を設けた。

取り組み期間終了後、新人看護師による薬剤関連インシデント件数の解析を行った。また、年度末に新人看護師による成果報告会を開催し、終了後、新人看護師と係長を対象にアンケート調査を行った。

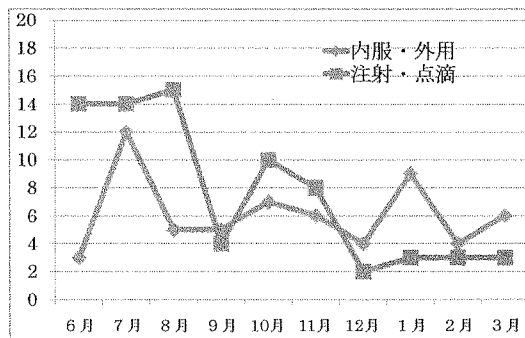


図1 平成20年度 1年目看護師による薬剤インシデント月別報告件数
(1年目看護師は6月からインシデントレポートを入力することになっている)

結 果

平成20年6月以降の月毎のインシデント報告件数では、同年9月から薬剤インシデントの減少傾向がみられたが(図1)、平成20年度の新人看護師による薬剤関連インシデント報告件数は最終的に137件となり、全年度から1.8倍の増加となった。しかし、新人看護師1人当たりには換算すると、平成19年度は3.9件であったのに対し、平成20年度は2.7件と約31%の減少を示した。また、病院全体におけるインシデント報告総数は、平成19年度が1510件であったのに対し、平成20年度は1482件であった。

新人看護師へのアンケート調査では、「取り組みをして良かった」と回答したものが97%に、「自分の行動や意識に変化があった」と回答したのも97%にみられた。「次年度入職者も同様の取り組みをした方が良いか?」の問いには、80%が「そう思う」と回答した。また、今回の取り組みについて、「医療事故防止における情報共有の重要性を再認識できた」「新人同士で医療安全に対する気持ちを共有できた」「成果報告会によって達成感が得られた」などの意見がみられた。係長へのアンケート調査からは、「新人看護師の考えが理解できた」「新人看護師によるチーム内での発言が増えた」「病棟全体で取り組むことができた」などの意見があった。

考 察

今回の取り組みは、薬剤関連インシデントという広い領域の中で、新人看護師自身がテーマを決定し、防止策を自主的に立案・実践するこ

と、ならびに自主的勉強会を定期的で開催し、継続的に学習することを重視した。その理由は、新人看護師が主体的に学習することの重要性を理解し、今後もそれを継続的に実践していけば、そこで会得した知識は必ず実践で活かされると期待したからである。結果、新人看護師1人当たりの薬剤関連インシデントを減少させることができた。寺井は、新人看護師に対しては事故防止に関する知識面でも現場の常識や基本から教育する必要があると述べている¹⁾。今回のように約9ヵ月間という長期間の取り組みを行った間に、現場の常識や基本を学ぶ段階から自主的学習によって知識を得ていく段階まで、実践の中で体験できたことは、医療安全の領域のみならず新人看護師が今後成長を重ねていく過程でも十分に活かされると思われる。

さらに、新人が医療安全に対する取り組みを主体的に計画・実践することで、部署全体の安全意識の向上という波及効果をもたらした。平成20年度のインシデント報告総数は、平成19年度に比べてむしろ減少傾向となり、病院全体の安全意識の向上にも寄与したと考えられる。また、新人看護師が立案した計画が部署内で認められ、部署全体の取り組みとして採用される事例もあった。このような経験は、新人看護師の各グループ内における建設的な発言の増加をもたらし、医療安全に対する意識の向上をさらに高めたといえよう。

一方、アンケート調査の結果から、「次年度入職者も同様の取り組みをした方が良い」と答えた新人看護師が約80%と、他の前向きな回答に比べて少なかった。これは、新人看護師にとって、今回の取り組みによる負担が予想以上に大きかったためと考えられる。池田は、本来人間は自ら動機を強め負担を軽減し、周りからの支援を得ながら、本人がシーソーの支点を自ら右へ動かして保健行動を続行できる力を持っている²⁾と述べている。今回、すべての新人看護師が、長期の取り組みを達成できた背景には、係長や病棟スタッフの支援があったことに加え、新人看護師の主体的な動機付けが十分にできていたからと考える。

今後の課題として、医療安全管理者は、新人看護師や支援者の負担が少ないより効率的な取り組みを計画し、安全意識の向上を推進してい

く必要がある。日本看護協会が行った調査では、新卒看護職員が仕事を継続していく上での悩みとして、約70%が「医療事故を起こさないか不安である」という項目を、また約60%が「インシデントレポートを書いた」という項目を選択している³⁾。インシデント低減の取り組みは、看護職員が安心して働ける環境づくりの一環でもあることを認識し、今後の取り組みを行っていく必要がある。

終わりに

薬剤インシデント低減を目的とした1年目看護師による自主的な取り組みは、病院全体におけるインシデント低減に寄与した。また、その安

全対策を部署全体で実践することにより、指導者を含めたスタッフ全体に対する安全意識の向上などの教育的波及効果も期待できる。今後は、より負担の少ない効率的な取り組み方法を模索していく予定である。

引用文献

- 1) 寺井美峰子：誤薬防止のための教育効果、EBNURSING、VOL4.66.2004
- 2) 池田優子：人材育成プログラム企画・運営の着想と工夫、看護管理、3.238.2004
- 3) 日本看護協会：新卒看護職員の早期離職等実態調査、2004